

## \*自然神学の社会科学への拡張

### 後期オリエンテーション

#### 1. 自然神学とその歴史的展開

1-1: 自然神学とは何か    1-2: 自然神学とキリスト教思想（弁証と論争）の形成

1-3: 自然神学と自然学・自然科学    1-4: 自然神学の古典的な諸問題

1-5: 自然神学の拡張と聖書

#### 2. 自然神学の拡張と科学論

2-1: 聖書の社会教説    11/27

2-2: 聖書の経済・環境思想    12/1

2-3: 聖書の政治思想    12/8

2-4: 自然神学から社会科学へ    12/22

2-5: キリスト教思想と科学技術    1/5

2-6: キリスト教思想と生命    1/12

2-7: キリスト教思想と脳科学    1/19

フィードバック

## <前回>自然神学の古典的な諸問題

・ニュートン主義のデザイン神学と進化論、天文学から生物学への争点の移動

### (1) 啓蒙主義と聖俗革命

1. 西洋の「宗教と科学」関係論は、18世紀、大きな変動に遭遇する。現代人がイメージする科学、あるいは宗教と科学との関係理解は、この変動に規定されている。

聖俗革命：知識を共有する人間の側の世俗化／知識を位置付ける文脈

「神—世界—人間」→「世界—人間」

2. 「近代科学」は、次第にその元来の文脈から離れ、一つの自律的な活動として自立して行く。ここに啓蒙的知、啓蒙的な科学理念（実証科学としての自然科学）が誕生し、その後の近代的知のモデルとして機能することになる。「宗教と科学」の対立図式は、この延長線上に発生することになる。

3. 代表例としてのラプラス

4. 注意点：科学の分野における相違あるいは時差

### (2) 進化論の衝撃

5. 19世紀の自然神学：生命現象という最後の砦

自然神学（デザインからの神の存在論証）は、18世紀の啓蒙主義の登場にもかかわらず19世紀の前半までは（ウィリアム・ペイリー）十分に説得性を保持していた。

・自然界における見事な秩序という証拠から神の存在を推論する

・生物の環境への適応に関してもっとも信憑性のある説明を与えた

5. キリスト教的生命論：アリストテレスの生命論＋聖書の創造物語

6. ダーウィンの進化論は、生命の環境への適応についても——突然変異と自然淘汰（偶然と必然）との相互作用——、神なしに説明する可能性を提示した

7. 19世紀のダーウィンの進化論の登場→進化論論争、しかし、初期の論争は、科学も宗教がそれぞれの範囲を逸脱して行った感情的応答と言わねばならない。

・19世紀の進化論は十分に科学的か？    ・進化論は神の否定を帰結するとは限らない。

第一次原因と第二次原因の区別を導入。

8. 対立図式の社会的説明：19世紀後半に、自立した専門家集団として登場しつつあった専門科学者の集団とそれまで生物学をリードしてきた聖職者兼科学者の集団との間の、つまり二つの知的エリート集団間の闘争。

### (3) 創造科学

9. 19世紀的な対立図式は、宗教と科学の区別・分離論によって、原理的には解決した。しかし、現実には様々な対立が残っている———。
10. キリスト教サイドでの対立論の代表は、「創世記の創造物語こそが真の科学である」とする創造科学論者である。

### (4) 現代キリスト教神学と科学

12. 神学と科学との分離＝対立の原理的回避 → 無関係・無関心
13. そのために採られたのが、意味と事実との区別——宗教は人間の生きる意味・価値に関わり、科学は事実に関わる——、あるいは客観的真理と主体的真理（キルケゴール）の区別という論理である。

### (5) 分離・無関係から対話・再統合へ

12. 1970年代以降、思想的状況は大きく変化した。  
近代科学技術の問題性が顕わになり、人類は大きな問題に直面していることが、無視できなくなり、宗教も科学も（宗教者も科学者も）、同じ問いに直面し、共通の課題を持っていることを意識せざるを得なくなった。
13. 区別の上にたった相互関係の確認
14. 21世紀の宗教と科学の関係は、どうなるか。可能性は三つある。
- 1) 19世紀的な対立図式に戻る。
  - 2) 20世紀的な分離・無関係の図式を継続する。
  - 3) 新しい関係構築、対話の構築を試みる。

## 1. 自然神学とその歴史的展開

### **1—5：自然神学の拡張と聖書**

#### (1) コミュニケーション合理性の問いとしての自然神学

1. これまでの議論のまとめ：自然神学の可能性を論じる際のポイント

①自然神学、とくに神の存在論証は信仰を前提とした思想的営みであり、啓示神学と諸科学との媒介を意図している。議論のコンテクストを構成するその信仰内容から完全に切り離してそれだけで分析されるとき、個々の論証に対して様々な論理的欠陥が指摘されるのは当然である。

②自然神学あるいは神の存在論証は信仰内容をめぐるコミュニケーションにおける合理性の確保の問題と解することができる。信仰対象である神との関係で言えば、それは祈りや讃美のコンテクストにおける信仰の表明であり、同じ信仰を有する共同体内部では信仰者各自の信仰内容の合理的表現を可能にし、信仰内容が変質し逸脱するのを防ぐ機能を果たしうる。また、信仰者自身にとっては、信仰内容の自己理解を促す。以上は信仰共同体の内部コミュニケーションであり、自然神学はその合理性の確保に関わっていることになる。次に、異端者や有神論的異教（キリスト教に対してはユダヤ教、イスラム教など）に対しては、自然神学は、論争相手がどんな原理に立っているか、またお互いが原理のどの部分を共有しているか、一致できない部分は何か、などを明確化し、その上で論証が可能

S. Ashina

な場合にはその論証の合理性を確保するのに貢献しうる。もちろん、論証が不可能な場合は、相互の論破という作業に移る。無神論者の場合も理論的には異端者や異教の場合と同様であり、こうした外部コミュニケーションにおいて自然神学のなす貢献は、共通の議論の場を明確にし、対話可能性の範囲を明示することである。いずれにせよ、現代に思想状況において自然神学の可能性を考えるときの第一のポイントは自然神学を宗教におけるコミュニケーション合理性の問題と考えうるといふ点であろう。

③しかし、繰り返すように自然神学による論証は無神論者の回心に関しては無力である。その場合、それは論証というよりも、説明ないしは告白にとどまる。論証と信仰との関係において、信仰から論証への運動はいわば自然に生じるとしても、論証から信仰への移行の方は、自然神学だけでは説明できない複雑な諸要因の存在を念頭に置く必要がある。つまり、信仰は、知的論証（知識・認識）、意志的決断、感情的関与が相互に絡まりあった一つのプロセスとして理解すべきであるように思われる。

## （2）コミュニケーション合理性と宗教間対話

2. コミュニケーションは、意味と理解を前提にする。

歴史の非完結性（終末以前、間の時代）

首尾一貫した連関を破る様々な断絶・溝の存在、複数性・断片性

↓

意味と理解の成立には、諸伝統の相互関係・対話の成立の場が必要。

意味論と終末論（終末と先取り）

3. 人間存在自体から。人間の生物学的条件から？

↓

形式性における普遍的前提としての言語

言語・意味は、存在論的概念である。

討論・対話の形式的条件としての語用論

ハーバーマスの普遍的語用論（Universalpragmatik）

4. 理想的発話状況（die ideale Sprechsituation、歪み無きコミュニケーション状況）の先

取り＝終末論

コミュニケーション的言語使用の四つの妥当性要求＝言語論

相互の理解、認識の共有、相互の信頼、相互の調和という相互主観的關係

理解可能性(Verständlichkeit)

真理性(Wahrheit)

正当性(Richtigkeit)

誠実性(Wahrhaftigkeit)

↓

現実のコミュニケーションの成立の場：

「相互に妥当請求を承認していることを相互に理解していること……」

つまり、無限遡及のパラドクスを内包した言語論的構造。

↓

真理とは何か：真理の合意説

5. Jürgen Habermas, Vorlesungen zu einer sprachtheoretischen Grundlegung der Soziologie

(1970/71), in: *Vorstudien und Ergänzungen zur Theorie des kommunikativen Handelns*,

- Suhrkamp, 1984, S.11-126.
- Nicholas Adams, *Habermas and Theology*, Cambridge Univ. Press, 2006.
- Wolfgang Pauly, *Die geschichtliche Entwicklung religiöser Deutungssysteme. Die Erkenntnistheorie von Jürgen Habermas und ihre theologische Relevanz*, Saarbrücken, 1989.
- Martin Jay, *The Dialectical Imagination. A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Little, Brown and Company, 1973.
- Stephen C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983.
- ユルゲン・ハーバーマス『自然主義と宗教の間 哲学論集』法政大学出版局、2014年(原著2005年)。

### (3) ティリッヒの「宗教の神学」

(芦名定道『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994年。)

#### 1. 宗教現象学・宗教史学→類型論、動的類型論

比較という作業：三位一体論の位置 (多神教、一神教、三一神教的一神教)

*Systematic Theology. vol.1*, 218-230.

生の弁証法的運動 (生ける神)、キリスト論



キリスト教教義としての三位一体論

#### 2. 対話をめぐる諸問題

・対話の条件：*Christianity and the Encounter of the World Religions*, 1963.

(Paul Tillich. *Main Works*, 5), p.313

- (1) 相互に相手の宗教の価値を承認し合うこと。固有の真理性をもつ相手。
  - (2) 対話の当事者がそれぞれの宗教を代表していること。自らの宗教に対する確信と説明能力。
  - (3) 共通基盤 (common ground) の存在。 cf. common basis
  - (4) 相手の批判に開かれていること。
3. 対話の意義あるいは動態

対話を媒介とした自己理解の深化

cf. 内省による自己理解、現象学と解釈学

自己と他者の動的連関

理解と批判の媒介

他者と批判を経由する自己理解

#### 4. 対話の主体

個人／共同体／思想

公式の教会組織との関わりを持ちつつ、その周辺で

解放の神学、あるいはキリシタン

基礎的共同体 (Pieris, the basic communities)

組、講 (狭間芳樹「近世における民衆と宗教——キリシタンと一向宗」、

芦名定道編『比較宗教学への招待』晃洋書房)

現代日本、現代の東アジアでは？

スピリチュアリティ・個人主義以降の共同性

↓  
個人と共同体との関係性についての理論構築が必要。  
人格と共同性

#### （4）自然神学の拡張と聖書

##### 1. 自然人学全般のモデルとしての狭義の自然神学

聖書の創造論と自然学（形而上学）との共通の場としての「宇宙」  
宇宙の秩序と人間の位置、そして悪

↓  
自然神学と聖書  
宇宙論的な諸宗教における共通の地平、それに基づくコミュニケーション

##### 2. 自然神学の社会科学の問題領域への拡張

別の意味の地平へ移行する。  
社会的場において。家族から国家へ。

##### 3. キリスト教思想（神学）—聖書・聖書解釈—社会科学：社会、政治、経済

- ・自然神学としての基盤・規範としての聖書学：
  - 神学と諸科学との接点・コミュニケーション可能性。
  - 神学と社会科学→人間学（人文学）、理念／現実
- ・人格的社会的連関：親密圏から公共圏
  - 市民社会、国家・民族、国際・帝国
  - 性、家族

##### 4. トレルチ『社会教説』

社会教説とは。教会、分派、神秘主義の三類型。自然法。経済、政治、家族。

Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, 1912 (*Gesammelte Schriften* 1. Scientia Verlag)

『古代キリスト教の社会教説』（高野晃兆・帆苺猛訳）教文館。

##### 5. 『古代キリスト教の社会教説』より

- ・社会的なもの、社会学的宗教的基本図式、基本理念
- ・イエスの説教→絶対的個人主義と絶対的普遍主義
- ・理念と社会形成

「かかる社会教説によって近代的な状況にとって何か有用なまた価値あるものになり遂げられるかどうかということだけが問題なのである」（17）

「歴史的な勢力としての教会並びにキリスト教はあらゆる点においてその過去によって、つまり聖書と共にたえず改めてその影響力を及ぼしてきた福音によって並びに社会生活及び文化全体に関係する教義によって、規定されるという基本的事実にぶつかる」（18）

「《社会的なもの》（das »Soziale«）とはそもそも何を意味するのか」（20）

「《社会的なもの》の概念はむしろ今日よく知られた意味において一般的な社会学的な諸現象の特定の狭く限界づけられた断面、即ち国家的な規制と政治的な関心から解放された或いはかかるものからは二次的にのみ問題とされる社会学的関係を意味する。この社会学的諸関係は経済生活、住民間の緊張、分業、階級分化並びに直接政治的と関係づけられない他の二、三の関心から生じるが」、「今日の状況によって特に強調されている《社会》Gesellschaft と《社会的》social という言葉のこの狭い意味にわれわれは留まらねばならぬ

い」(24)

「近代科学が《社会》Gesellschaft という言葉で先ず第一に経済現象から生じる生活連関を考えているのは正しいであろう」(26)

「個人と共同体 Gemeinschaft の関係のキリスト教的秩序のような非常に普遍的な理念から生ずる社会学的な基本見解 (Grundanschauung) はあらゆる生の関係が何らかの方法で影響を及ぼすところの社会学的な基本図式 (ein soziologisches Grundschema) を意味するのは確かにもちろんのことである」(26)

「特に経済的—分業的《社会》Gesellschaft は宗教的理念から導かれる連帯

Gemeinschaftlichkeit とは異なった社会的基盤をもった独立した現象であり続ける」

「国家と社会 Gesellschaft とはわれわれの近代的な用語によってはじめて区別される。《社会》の特徴的なものは近代的な、形式的一法的国家概念との対立によってはじめて生ずるのである。この対立からはじめて社会という概念全体がその光と具体的な意味とを持つのである」(27)

「はじめから、キリスト教のすべての社会教説は同時に国家と社会についての教説でもあった。その際にキリスト教の人格的なものから出発する思考形式にとって家族は同時に国家と社会の前提であり、それ故キリスト教の社会教説に属している。宗教的な共同体理論にとって家族、国家並びに経済社会は密接に結びつけられた社会学的な形成物として現れることによって、今やけれども再び《社会的なもの》の概念が拡大されるのである」(28)

「いくつかの方針」「第一にキリスト教固有の社会学的理念とこの理念の構造及び組織について問わなければならないであろう」(31)、「第二には、この社会学的な形成物と社会的なもの、即ち国家、経済的—分業的社会及び家族との関係について問わなければならないであろう」、「社会学的宗教的基本図式の他の生活環境への現実的な影響とはどのようなものであったか」(32)

6. 理念：福音（説教）・神の国 → 社会学的図式：絶対的な個人主義と普遍主義

→ <歴史的状況> 社会的なもの形成：家族、経済、国家

キリスト教の社会的三類型：教会、分派、神秘主義

愛の共産主義

#### <参考文献>

1. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。
2. A・E・マクグラス『科学と宗教』教文館、2003年。  
『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の展開』教文館、2011年。
3. John Hick, *An Interpretation of Religion*, Yale Univ. Press, 1989.
4. H・C・キー『初期キリスト教の社会学』ヨルダン社。
5. 大貫隆『福音書研究と文学社会学』岩波書店、1991年。
6. 土戸清『ヨハネ福音書研究』創文社、1994年。  
『初期キリスト教とユダヤ教——ヨハネ福音書研究の諸問題』教文館、1998年。
7. Martin Hengel, *Eigentum und Reichtum in der frühen Kirche, Aspekte einer frühchristlichen Sozialgeschichte*, Calwer, 1973. (ヘンゲル『古代教会における財産と富』教文館。)
8. John Hegeland, Robert J. Daly and J. Patout Burns, *Christians and the Military. The Early Experience*, Fortress, 1985. (ヘルジランド、デイリー、バーンズ『古代のキリスト教徒と軍隊』教文館。)